ヨーロッパの旅

平井信義

一、お正月

クリスマスの余韻がまださめない頃、大晦日の行事「ジルベスター」がやってくる。その日は大学も休みなので、私は下宿の部屋で静かに本を読んでいた。

昼をすぎると、戸外では小さな打上花火が始まる。筒から打ち上げられた花火は、冴えた空気に笛の音をヒューッ、ヒューッと響かせながら、高い家並の間で破裂する。そのパンパンパンという音は、時を追って増してきた。

この音は子供たちの好きな音だ。私の家の三階の窓があいて、ヴォルフの声がする。路上からの友人の呼び掛けに答えていたが、荒々しく窓をしめると、ヴォルフが階段をかけ降りていく音がして消えた。

戸外に群る子供たちの声が、花火の音の合間に、騒々しくなる。友達を呼び交う声。花火の音に合わせて、口でパンパンと叫び合う声。その声は、花火を買ってもらえなかった子供の声かも知れない——そんなことを思いながら、子供たちの群の動きが、花火の音と共に移るのを、部屋の中からきいていた。

午後四時前。花火の音が次第に少なくなるのを気にしながら子供たちがそれぞれの家路についたのを想っていた。時計の針が四時を指した時私は立ち上り、自分の机の上でビールの栓を抜き並々とコップに注ぐと、家族の写真に向って「新年おめでとう」をいった。ドイツの時間は、日本より八時間遅れている。今頃丁度除夜の鐘が鳴り響いているだろう——毎年、ラジオでその鐘の音をきくならわしにしていた私は、ラジオのあるその部屋を思い起して、郷愁にかられた。

ノレナ氏に迎えられて、下宿の部屋を出たのは、既に八時を過ぎていた。ドイツの冬は暮れ易く、夜も深い。私どもが戸外に出たときは、街灯の火も路面に淡く影を落しているような晩であった。曇っているのか星も見えない。街路には人も行き交う姿もまばら。ひたすらに襟元から耳朶にかけて、しみ入るような寒気を感じながら、私どもはせっせと歩いた。

彼の家には、既にシュッテ夫妻も来ていて、そこの女主人と話をしていた。私どもが、それぞれの席につくと、ノレナ君は新しい葡萄酒の栓を切り、自分のワイングラスに少量注いだ。そして一寸味わってから「仲々いい味だ」といって、皆のグラスに並々と注いで廻った。之がドイツの作法である。注ぎ終ると、それぞれグラスを手にする。そして一人一人目と目を合せて「プロースト」或いは「ウムヴォール」という。今日は気の軽い連中の集りなので、皆の顔は輝いていた。一と口飲むと、目差しと目差しを再び交す。そしてグラスを置いた。

「ドイツのクリスマスはいかがでした?」とシュッテ夫人が私にきいた。私は下宿の人たちと、静かなクリスマスを味わったことを話した。「日本でもクリスマスを祝いますか」シュッテ夫人の美しい微笑が続いている。私は、日本のクリスマスは、むしろ商店の広告に使われ、本当の信仰から出ているものとは別であることを話した。「ドイツのクリスマスは、恐らく世界で最も静かな、信仰に溢れたものでしょう。然し、この頃、矢張り商売の広告に使われる傾向がでて来たのは残念です」と夫人はいった。

シュッテ君は小児科の医者であるが、シーボルトの曾孫にも当り、日本のことに非常な関心を持っている。私に、日本の大晦日や正月の行事などについて、色々質問をした。私は、羽つき、カルタなどの概念を与えるために苦心した。「ドイツでは、こんな面白いことをするのですよ。一寸来てごらんなさい」女主人とシュッテ夫人が立上ったので、私は二人について、台所へいった。

ガスコンロに火がつけられ、水の入ったお鍋が用意された。そして、匙の中に小さな金属のかたまりを入れ、夫人自身、それを火にかざした。「之は鉛のかたまりです。こうして融けて来たら、さっとお鍋の中に流してごらんなさい。」ぷつぷつと泡立ち始めた鉛は、じゅじゅっと音を立てて、水の中で再び固った。「何が出た? 何でしょう?」二人は夢中でのぞき込んだ。「ライオン」「素適!」こんな会話に、二人の夫人ははしゃいだ。出来上った鉛の形で、来年の運を占うという遊びである。私も流し込んだ。「菊! 日本の国花!」二人は手をたたいてはやし立てた。応接室に残っていた男二人も表われて、それぞれ、自分で作った鉛の形を楽しんだ。

そうこうしている中に、再び花火の音が戸外にやかましくなって来た。ヒューッパンパンという音がさかんにきこえる。人の動きもあるのか、そこここに大きな話し声がする。「もう時間ですね」とシュッテ君が大きな腕時計をみていった。四人は、もとの部屋に帰って席についた。

女主人だけは「窓をあけましょうか。平井先生御覧になりませ」といいながら、通りに面した窓を開きに歩いていった。私も再

び立った。

窓をひらくと、冷たい空気がさっと入って来た。花火の音も、俄かに耳近くなった。昼間きいた花火は、破裂する音が強かったが、いま響いて来る音は、空気を切る笛の音だけが冴えて、パンパンという音は少ない。「赤が！」「白が！」と夫人が指す方に目を追うとその花火が、それぞれの光で闇空に孤を描いては飛び交い、間もなく消えていく。向い側の四階からも、誰か窓をあけて顔を出した。その隣りもあいた。斜の筋の二階・三階からも、顔が出ている。

遠くの教会の鐘が鳴り始めた。時を同じくして、間近の教会の鐘が高らかに響き始めた。十二時十分前。教会の鐘という鐘は一斉に、それぞれ高い低い音をガウンガウンと鳴り響かせている。町中が鐘で埋まってしまったかのよう。その間に、緑・赤・青・白の花火が音を立てる。教会の音は、それにめげず、更に高く強く響いてくる

家々の窓という窓に灯りがともって、そこから、何人かの人の顔が重なってみえる。誰もが「一九五五年よ、さようなら！」と別れを告げているようだ。私は恍惚として、夜空の動きに見入っていた「さあ、我々も今年に別れを告げ、新年を祝いましょう」とノレナ氏が言ったので席につくと、彼は新しい葡萄酒の栓を抜いた。そして、なみなみと注がれたワインで、私どもは「プロースト」を交し合った。私は「一九五六年よ、昭和三十一年よ、世界の平和の中に、どの国民にも幸福な生活を招いて下さい。殊にドイツ国民のため、日本国民のため！」と言うと、皆はもう一度盃をとり、厳粛な顔で「プロースト」を言った。

二、ドイツへの礼讃

異国での私の生活も、正月を迎えると三ヵ月目に入った。二回目の外遊とは言え、矢張り最初の二ヵ月は言葉にも慣れず、祖国を背負っているという緊張感もあって、毎日々々を夢中で過していた。しかし、風習・食事、研究が一応軌道に乗った三ヵ月目頃から、漸く落付いて周囲を眺めることが出来るようになった。

その時、一番強く心に蘇って来たことは、日本にいて聞いたり読んだりしたドイツについての印象記とは、かなり異なった印象をドイツに対して私が感じていることであった。日本で聞いていた印象記は、本当にドイツ又はドイツ人の秀れた点を讃美したものばかりであった。子供のときから殊の他ドイツに憧れていた私には、非常に美しいイメイジの連続が頭を占めていたといってもよい。

処が、実際に生活してみると、日本で感ずるような不愉快な目にもしばしばあったし、立派に見えるドイツやドイツの子供の行動も、少し立ち入って体験してみると、いろいろな欠点をもっていることを知って戸まどいした。

「ドイツがお気に入りましたか？」――こういう質問は、会う人毎にきかれる。社交的に答えれば「非常に、」とか「大変気に入っています」と言うべきであろう。私も、しばしばその外交辞令を用いた。ところが、日本に三年もいたというA氏にその答えをしたとき、「正直に言えばそんなことはないとお答えしたいですね。どこの国にもよい人と悪い人とがいる。どこの国にもよいことと悪いこととがあ

る。そこを貴方もよく味わい別けなければなりません。私も、日本を美しい国だと思います。然し、正直、しばしば不愉快な思いもしました」といって、穏かな微笑で言われた。

その後、日本できいて来た話というのが、しばしば外交辞令の場合か、或いは単に旅行者としての印象で、その国に根を下して考えたものでないということが分って来た。私自身もその後ドイツ以外の国々を旅行した。そして随分気に入った国がある。そんなとき「こんな国に住んでみたい」と、長くその国に住みついている日本の方に言ったことがある。するとその方は「旅行者はみんなそう言われるが、住んでみてごらんなさい。どうして、どうして」答えられる。「その上日本人はロマンチックであり、島国根性を手伝って欧米に対する劣等感が強いから、外のことが何でもよく見えるのですね」と言った方もあった。又、「外国に出たということだけで、何か素晴しいことをして来たように感じ、それを誇大喧伝する人が多いのではないのですか。ですから、あることないこと、美化して話す悪いくせを持っていますね」と言った方もある。

この二三年間に、ヨーロッパへ回って来られた代議士は百人近くなるそうで、その人たちが、欧米を美化して演説して歩く代表者だということを方々できかされた。その実、その人たちは、旅行の先先でどこか御案内しましょうか？」といわれると、「もう沢山」といって、留学生を集めては内地への手紙書をしているのだそうだ。而も、その一通が、次の選挙で百五十票になると計算しているという。

私はこれをきいたとき、日本人の欧米に対する劣等感が、こんなところに利用されているのかと、しみじみ情なくなってきた。ヨーロッパの人たちは国を接しているから、すぐに他国のことがわかる。それぞれ遠い異国にいるという感傷を持たずに、それぞれの国の美点をその目で見ると共に、欠点もきちんと批判している。ところが欧米にいく日本人は、それが出来ていない場合が多い。

殊に言葉に不自由な日本人旅行者は、その国々の人たちと親しく話をしたり議論することが出来ない。そこで、その土地にいる日本人の印象を聞いて帰るか、印刷物をもらって、その知識がお土産となる危険がある。印刷になっているものが、大概よいことの羅列であることは、日本の役所の印刷物を見てもわかる。

又、欧米に旅行する多くの連中が、かなり旅費をもっていく。どうせなら一流の宿屋に泊り、一級のものを食べるので、お土産も上等なものを買う——というわけで、之を日本の生活や物品と比較したら、見劣りがするのも当然である。泥くさいような生活をしないでは、本当のことはわからない。殊に案内者がついた様なときは、更に正体をつかみえないままに旅行を終ることだってあるだろう。

しかし、歓呼の声で送られ、歓呼の声で迎えられるとそれが欧米にいったという優越感と組合さって日本人の仲間に向って平凡な話が出来なくなるのが、いまの日本人の欧米感であるまいか。

幸い、私は十ヵ月をドイツに生活することが出来た。勿論、之でドイツについて語る資格があるとは思わない。然し多くのドイツ人と接し、又日本にいたことのあるドイツ人とも意見を交すことが出来た。従って見たまま、感じたままは語る資格があるそうである。

ドイツでもお金に随分不自由したが、ヨーロッパの旅行は、殆ど最低の費用で廻ったろう。勿論、殆ど総てが三等車（昨年六月から欧州では一・二等車のみとなり三等車は廃止されたが）で廻った。駅に着くと、先ず地図を買い、駅の喫茶室でそれをよくよく眺め廻す。そして町の全貌と交通系路をのみこんでから、徒歩か市電・バスなどで歩き回る。どこにいくにも、タクシーを利用したことはない。従って、道に迷うこともある。すると人にもきかなければならない。安いホテルを見つけるのも一と仕事である。土曜日曜にぶつかって、ホテルがなく情ない思いをしたこともある。奮発して多少よいホテルに泊ったのに、湯の出ない室だったこともある。意外によいパンジョンで、非常に大切に扱われたこともある。その苦しかったり楽しかったりした思い出はつきない。然し、静かに一年をふり返ってみて、強い印象となって蘇ってくるのは、ドイツでも旅先でも親切にしてくれた人たちの顔である。その親切は儀礼的なものでなく、短期間のつき合いであっても、心を打ち明けて話し合うことの出来た人たちの顔々々である。

表紙について

武井武雄

よりによって私が多忙の絶頂で悲鳴をあげているまっ最中に、及川さんとフレーベルとで強引に「幼児の教育」の表紙を割込んでしまった。私はテーブルの上に額でゴッツンと音をさせてお辞儀をしてあやまったのだが、どうも勘弁して貰えない模様だった。何ともはや万止むを得ない仕儀と相成ってしまった。もし万目注視の路上でこういう割込みをやったらきっと正義を重んずる群衆の為に彼及び彼女はなぐられて怪我をしたであろうと思う。

四色よりも三色、三色よりも二色の方が簡単で描くのがらくだろうと素人は考える。らくなのは製版と印刷との方で、描く側にとっては色数が少ない程むつかしくなる。その上一色だけは年間に四回も変るという事になるとこれは手品に類するもので、筆者は障害物競走をやらされているようなものである。

貝の形の面白さは昔から注目していたのだがまだ画に登場させた事はせいぐ一度位しかなかった。これは実物を掌にのせて造化の妙に駭くというのも結構だが、写真などで見てそれを小豆粒位の大きさに縮少して想像したり、ビルディング位の大きさに空想して楽しんだりしてみると造型の不思議の唯ならぬ事を知る事が出来る。

ハッキガイ（白鬼貝）は五センチ位のものだそうだが、そんなちっぽけな躰軀でも充分鬼の風手と貫録とをそなえている。植物でも貝類でもその命名者のうまさに屢々感服する事がある。この表紙は子供のかき上れる位にまで拡大したが、この拡張には税金も手間も何にもかからない。ここいらが些少ながらえかきの特権というものらしい。